

日風堂

〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉第113号 令和3年(2021)9月1日



虫送りの写真 土佐市岩戸 昭和55年撮影

資料見聞

虫送りの写真

田辺寿男の民俗写真より

虫送りは、稲につく害虫を追い払うための行事です。ほとんどの地域では廃れてしまいましたが、一部では伝統行事として今も引き継がれています。

民俗写真家の故田辺寿男氏が、土佐市岩戸の虫送りを取材したのは昭和55年6月、旧暦5月20日のことでした。

田辺氏の調査カードには、早朝から当屋（祭りの当番の家）で協力して大草履を作る様子や、午後から鉦太鼓を叩き、「稲の虫は西へ行け、ホーイ、ホーイ」と唱えながら田のなかを進んだことが記されています。また、集落境の7ヶ所に折袴札を立て、集落の西端へ大草履と折袴札を立て、当屋で直会をした等、行事の過程が押さえられています。

虫送りは大抵が歩きですが、田辺氏は当地で大草履を荷台に乗せて田を巡る軽四トラックを撮っています。それは同氏が撮りたいと考えた「変化する民俗」の一コマでした。

その一方で、田辺氏は「普遍的な喜びや悲しみ」も追いかけています。本写真の大草履を持つご婦人の方の笑顔は、祭りの日の喜びにかがやき、色あせない魅力に満ちています。

(中村)

開館30周年記念企画展

「田辺寿男の民俗写真5」

「春夏秋冬としの祭り」

会期…令和3年10月8日(金)～12月5日(日)

中村 淳子

田辺寿男氏(1921～2010)は、建依別写真という先鋭的な写真クラブに所属し、アマチュアカメラマンとして活躍していましたが、民俗の調査研究に次第に傾倒していきました。そして、民俗行事などの状況がわかる写真を撮るようになりました。

高知県の民俗の貴重な記録であり、滋味あふれる表現のある田辺氏の写真は、そうした経歴によるところが大きいのと思われまます。「仁淀村と無形文化



写真1「仁淀村と無形文化財 田辺寿男写真展」
(右)田辺寿男氏 昭和39年

財」と題された最初の個展にも、すでにその片鱗がみられます(写真1)。

当館は田辺氏の写真資料を所蔵し、分類整理を行いながら折々にご紹介しています。第5回目となる今回は、四季折々の祭りの写真を、日常の暮らしの写真(写真2)を織りまぜながら展示します。

一年ごとの同じ日や、暦のうえで同じ時期にくり返される祭りを「年中行事」と言います。今回の展示では正月や盆などに家で行われる年中行事を中心にご紹介しつつ、秋祭りなど神社や集落の祭りも取り上げます。

暮らしの変化によって、昔ながらの年中行事や祭りはほとんど消えていっています。また、現在は新型コロナウイルス感染症拡大のために中止になった所も多く、その意味でも、祭りが盛んに行われていた頃の様子を活写した田辺氏の写真記録は貴重です。その一部をご紹介しますいきましょう。

■正月

正月には、おせち料理や初詣など今

も盛んな行事のほか、かつてはその前後でさまざまな行事が行われていました。

師走には、餅つきなど正月の準備がはじまります。「お松様迎え」といって門松にする木を山から伐ってきて、注連縄をなつて門松に張るほか、家の内外の神仏や墓に供えてまわります。

元日は井戸や川へ水を汲みに行く「若水迎え」が最初の行事です。昔は元旦に皆が一斉に一つ年をとりました。柀に入った米を頭にいただいたり、蓬菜盆に盛った米や柿を口に入れたりした「年取り」です。

それから田畑の「歛初め」など仕事始めの行事が続きます(写真3)、今もおなじみの七草に続いて正月14日から15日にかけてもいろいろな行事があります。正月に供えていた米を粥に炊いて人間が食べるほか、柱や木に塗る「粥正月」、歛などの道具を床の間に並べて餅などを供える幡多地域の「カナミコ様」、注連縄を焼いて餅をあぶる「左義長」など、地域性も含め実に様々です。

■春から夏へ

恵方巻きがすっかり定着した節分ですが、旧暦では元旦と前後しており、正月行事の一部でした。節分の翌日が立春で、暦の上では冬から春へ変わ

ます。山間部では注連縄を張ったり、トゲのある枝を戸口に置いて鬼の侵入を防ぐ習俗があります。囲炉裏に大豆を12個並べ、焦げた様子で農作を占う「年占」も行われました(写真4)。

三月三日は女の子の節供で雛人形を飾り、花きびを供えます。五月五日は男の子の節供でフラフや幟を立てます(写真5)。

節供には体の健康を祈る厄除けの意味もあつたようです。雛人形はもともと穢れを付けて水に流すヒトガタが変化したものとしていいます。また、五月四日を「女の家」と言い、体の調子の悪い所に菖蒲を巻いたり、屋根に菖蒲を上げたりする所もありました。

■七夕と盆

七月七日の七夕は、庭に2本の笹竹を立てて縄を張り、田芋の葉やフロウ豆を飾りました。川を横切るように縄を張り渡す集落もあります。

盆には先祖や初盆の霊を家に迎えるため、高ボテや法界と言って松明を焚いたり、仏壇をヒノキの葉や笹竹で飾ったり、盆棚を作ります。四万十川上流域では、鉦や太鼓を激しく叩く念仏行事も行われます。

■実りの秋

稲の収穫が終わると秋祭りの季節が



写真3「鎌初め」仁淀川町(旧仁淀村) 沢渡 昭和37年



写真2「無題」高知市 撮影年不詳



写真5「五月節供」土佐市宇佐 撮影年不詳



写真4「節分」仁淀川町(旧池川町) 坂本 昭和40年



写真6「霜月祭」須崎市多ノ郷 賀茂神社 昭和57年

建依別写真壇元会員で写真同人「現」会員の小林勝利氏と武吉孝夫氏が、11月13日(土)に田辺寿男氏の写真について対談します。どうぞお楽しみに。

冬来たる
山間部では、11月から12月にかけて「神楽」が奉納されます。田辺氏は山主やダイバンなどの見事な舞いを数多く撮っていますが、神楽を楽しむ人々のいきいきとした表情も捉えています。須崎市多ノ郷賀茂神社の「霜月祭」では、鋤をつけた牛、鎌や鎌を持った人々の行列がみられます。農作業が終わる冬に、神に感謝し、来年の豊作を願います(写真6)。
そしてまた正月が訪れます。かつての土佐では、このような祭りや行事が繰り返され続けてきたのです。

やってきます。
中土佐町久礼八幡宮の「おみこくさん」は、深夜に巨大な松明を男達がかつく風習が有名です。しかし、実は松明は先導係に過ぎず、主役は米の「おみこく」です。ホウドウと称する竹を立てた当屋から神社まで、おみこくを運ぶのが行事の主眼です。収穫した米、おみこくを神に供え、その米で醸した一夜酒が奉納されます。

企画展「田辺寿男の民俗写真5―春夏秋冬としの祭り―」に関連して

新型コロナウイルスの時代に

祭りの意味を考える

梅野 光興

令和2年の春以降、高知県内でも多

くの祭りが中止になり、また神事のみになり、また実施されても関係者だけの参拝となるなど未曾有の事態になっています。ただでさえ、高知県の祭礼芸能は、過疎化、少子化の影響で、縮小・消滅が続いています。新型コロナウイルス拡大による祭りの中止は、何とかがんばって続けてきた地域の祭りに大きな影響を与えるのではないかと危

惧するところでは

奇しくも秋祭りシーズンに開催される企画展「田辺寿男の民俗写真5―春夏秋冬としの祭り―」が、祭りの魅力を思い起こさせ、新型コロナウイルス終息のあかつきには、再び各地で祭りが復活することを祈るばかりです。さて、本稿では、土佐の祭りや年中行事の意味を思いつくまに記してみよう。

■目に見えない存在との交流

祭りは、カミや霊など、目に見えない存在が主役です。目に見えないので、カミや霊を示す物や装置が登場し、祭りを興味深いものにしていきます。

秋祭りでは、氏神

の御神体が、御神輿に乗って神社の中から村の中へ出てきます。氏子たちは、各地で待ち構えていて、神輿の下をくぐり抜けたりします。こうすれば健康になると考えているのです。これもカミと人の交流の姿です。

盆には亡くなった人の霊や先祖が帰ってきます。ホーカイとかタカボテと呼んで松明を高く掲げます（写真1）。初盆の場合、特別に水棚などと呼ばれる祭壇を竹や檜で作り、柄杓で水をかけたり、火をともして死者を供養します。

時にはあまり来て欲しくないモノもやってくるようです。禰原町の堂の口開けでは、大きな草履を作って村境に立て、この集落にはこんな大男がいるから入ってくるな、と目に見えない外敵を脅します。

目に見えない存在である神や霊を作



写真2「池川神楽」仁淀川町（旧池川町）撮影年不詳

り出すことで、神様からパワーをもらったり、悪霊を追い払ったり、亡くなった故人の霊と交流することが可能となります。祭りは人間が生きるための力や心のやすらぎを与えてくれます。神仏と人々をつなぐ宗教者の活動も見逃せません。平地農村の秋祭りに対し、水田の少ない山間部では霜月（旧暦11月）前後に神楽が奉納されます（写真2）。天照大神や山主などの神々が登場し、悪事をたくらむダイバンという鬼は屈服し、七つの宝を差し出します。太夫という神仏混淆こんごうの宗教者が伝えた祭事芸能です。

■祭りを支える社会

祭りをおこなうためには、どんなに小さくても祭りを実施する主体となる社会が存在します。家の祭りは家族が、氏神の祭りは村が主体です。その他、



写真1「ホーカイ」仁淀川町（旧池川町）竹ノ谷 昭和35年頃



写真3「神楽のときの宴」大豊町岩原 昭和40年



写真4「若水汲み」仁淀川町(旧仁淀村) 沢渡 昭和37年

先祖祭祀には系統を同じくする一族が、仕事場の山の神祭りは同じ山で働く山師たちが、というように、かならず祭りの目的に応じたグループが存在します。祭りは特定の集団が力を合わせて実施し、その願いや思いを共有するのが目的ですので、その祭りの主催者を知ることで、祭りの意味や目的がつかみやすくなります。

家族はもとより、同じ地域に暮らす人、同じ仕事をする人がひとつの祭りをおこなうことで、集団としての結びつきを強めることも、祭りの大切な役割です。

■ともに食べる

私たちが祭りを見学に行く時は、神事や芸能を見終わったら、さつさと引き上げます。しかし、実は祭りはまだ終わっていません。場合によってはここからが本番とさえ言えるかも知れません。

それは直会なほひです(写真3)。カミに供えた物を人間も頂くのが直会の本来の意味です。「御神酒」が参拝者に勧められるのは、神様に供えた有難いお酒だからです。お供えの他にも人間が楽しむためのごちそうも準備されています。今では、おいしい特別な食事の機会は増えましたが、質素な食生活だった昔は、小ささまざまな祭りはご

ちそうにありつける貴重な機会でした。

■特別な時間を作る

まとめると、祭りとは、ある特定の集団が特定の目的をもってカミや霊など目に見えない存在と交流し、その後、食事や飲酒をもにすることで、集団の結びつきを強める特別な時間でした。そして、四季折々にさまざまな祭りをおこなうことは、一年という時間を



写真5「オサバイ様」四万十町(旧窪川町) 昭和53年

区切り、認識することにもつながりました。

正月は一年をリセットし、気持ちを新たにする時なので、若水汲みに始まる仕事始めの行事をおこないます(写真4)。

田植の時に、家に祭っていた石をオサバイ様として田の畦に移し、そこで祭り、稲が稔ると家に戻すのも、稲作と一年の祭りが連動している事例です(写真5)。

祭りは、暮らしや仕事や集団の意味と役割を明確にして、日々の暮らしを活性化する機能も果たしていました。コロナウイルスのために祭りがおこなわれないと、社会は疲弊していくでしょう。県内各地の祭りが復活する日を楽しみにしています。

江戸時代における土佐の学者の熱意 開館30周年記念企画展

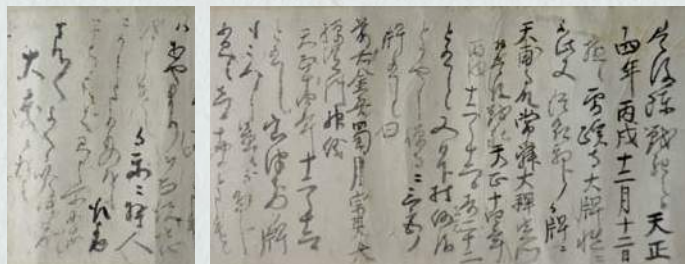
「長宗我部氏とその時代」に向けて

会期…令和4年1月14日(金)～3月21日(月祝) 石畑 匡基

開館して30年の間に、これまで当館

では長宗我部氏を主人公にした企画展を開催して参りました。今回は、平成27年度に開催した「大坂夏の陣400年 長宗我部遺臣それぞれの選択」以来6年振りの長宗我部氏関連の展示となります。本展では、長宗我部氏が生きた時代の古文書を展示することはもちろん、江戸時代から現代に至るまでの長宗我部氏研究についても着目した展示を行います。

準備を進めたいと思



奥宮正明宛谷秦山書状(抜粋・当館蔵)

います。

写真図版として掲げている古文書は土佐の学者である谷重遠(1663～1718)が、弟子の奥宮正明(1648～1726)へ宛てた書簡です。重遠は、秦山と号しており、谷秦山の名前で知られています。積文は次のとおりです(改行は/)。

豊後陣戦死之日、天正十四年丙戌十二月十二日(相)極候、雪蹊寺大牌樋ニ如此、又信親朝臣ノ御牌ニ、天甫寺殿常舜大禪定門ノ於豊後戦死、天正十四年丙戌十二月十二日、寿二十二ノと有之候、又日下村真光庵ノとかや申禪寺に三宮ノノ牌有之候、曰ノ前右金吾蜀月宗英大ノ禪定門神儀ノ天正十四年十二月十二日ノと有之候、室津右衛門ノ牌ノもうつし置候が当分ノ不見候、先日十四日と申遣候ノハあやまりヲ正説と心得申遣候、御示に驚、人ノにかしたるものをも取よせ、ことく見申候所如右候、ノさてよく御吟味被成候てノ大慶ニ存候、

冒頭に「豊後陣」とあるのは、天正14年(1586)12月12日に、元親の

長男信親を始め多数の家臣が戦死した、いわゆる戸次川の合戦を指します。どうやら秦山が弟子の奥宮に以前伝えていた合戦の日付は14日であったようです。奥宮は、師匠である秦山の間違いを指摘しました。すると、秦山は自らの誤りを認め、「先日十四日と申遣候ハあやまりヲ正説と心得申遣候」(先日十四日と伝えていたのは、間違いを正しい説と心得てお伝えしていました)と謝罪します。さらに、「よく御吟味被成候て大慶ニ存候」(よく調べてくれて嬉しい)と弟子の指摘を褒めてさえます。たった二日とはいえ、土佐の歴史を探究する二人にとっては大きな違いであったことがよくわかります。さらに、奥宮は、雪蹊寺にある長宗我部信親の位牌など、同時代的な史料を根拠に自説を主張しています。この史料に基づき、歴史的事実を構築する手法は秦山から学んだものです。そのため、秦山も素直に奥宮の説を受け入れたと推定されます。秦山が奥宮に送った書状からも、両者の間には師弟関係を越え、研究者として互いに切磋琢磨するという姿勢がみえます。

そもそも秦山は、土佐史研究の必要性を説いて史料収集を始めました。そ

これらの成果は『土佐遺話』としてまとめられています。

また、門弟として秦山の史料収集に協力した奥宮は土佐国内に伝存した古文書を収録した『土佐国蠹簡集』を編纂しました。『蠹簡集』には、土佐国内の諸寺社や諸家に収蔵された古文書・記録・棟札・系図など932点が仁平元年(1151)から長宗我部氏や山内氏の時代まで年代順に収録されています。さらに、谷秦山の長男・垣守(1698～1752)は、奥宮の志を受け継ぎ、同じく史料集である『蠹簡集拾遺』を編纂しました。

右の両著は昭和52年(1977)に刊行された『高知県史』古代中世史料編にも収録されています。現在では、原本の所在がわからなくなっている史料も多く、長宗我部氏研究を行ううえで欠かすことのできない史料になっていきます。長宗我部氏が生きた時代を復元するうえで、江戸時代に生きた学者達が熱意を持って史料を残してくれたことを忘れることはできません。

本展では、書状といった、いわゆる一次史料に加えて、現在に至るまでの長宗我部氏研究の軌跡についても併せて紹介します。今後も連続と長宗我部氏研究が続いていくための一助になれば幸いです。

第16回岡豊山フォトコンテスト テーマ「岡豊山の春夏秋冬」 作品募集中!!

岡豊山で撮った、岡豊山を撮った写真であれば、最近撮ったモノでなくても、大丈夫。一般部門とケータイ・スマホ部門があり、お手持ちの携帯電話やスマートフォンで撮ったデータをそのまま送っていただくケータイ・スマホ部門は、より気軽に、今回はお一人2作品まで応募可能。令和4年のフォトカレンダーも作成予定です。



コロナでお疲れ気味の心身のリフレッシュを兼ねて、三密を避けやすい自然豊かな岡豊山へ、写真撮影にぜひお越しください。ご応募お待ちしています。
締切・令和3年10月24日(日)、詳しい応募方法などは当館HPで。
応募作品は11月26日(金)から令和4年1月30日(日)16時まで展示する予定です。感性豊かな力作をお楽しみください。(みんなのお気に入り賞)への投票もよろしくお願ひします。(総務事業課)

開館30周年記念

特別コーナー展「ぞんコレ!」準備中

会期 9月16日(木)～11月23日(火・祝)

当館では考古、歴史、民俗、美術工芸を専門とする学芸員が、それぞれ調査研究の成果からテーマを設定し、展示資料の意味や歴史的背景について解説する、いわば展覧会の「基本」ともいえる企画展をさまざま開催してきました。

しかし昨年、「これまでとは違う大人から子どもまで、もっと気楽に楽しめる分野を横断した展覧会はできないか」という声があり、今年「特別コーナー展」を開催することが決まりました。今回は学芸員以外の職員からもアイデア募集。知れば知るほど背筋がヒヤツとするような資料はどうかと言うことで、「ぞんぞんずる」(寒気がする)という土佐弁を採用。「ぞんぞんずるコレクション」↓「ぞんコレ!」知れば知るほどゾンゾンするれきみんコレクション」にタイトルが決定しました。土佐市居徳遺跡群から発掘された殺傷痕のある人骨や武市半平太が牢獄にとらわれた自身を描いた笑泣録など、これまでとはちよっと違う切り口で楽しめるミニコーナーです。(那須)

コーナー展 干支の玩具 寅 会期 12月17日(金)～令和4年1月30日(日)

郷土玩具収集家の山崎茂氏のコレクションを中心に、干支の「寅」にちなんだ全国の虎の玩具を展示します。出雲張り子(島根県)をはじめとする各地の「首振り虎」や狛犬のような鞍馬山の「阿吽の虎」(京都府)など、虎玩具があなたの心をトラえます。

当館は、山崎氏からコレクションを「寄贈いただいた平成23年の「昔のおもちゃ博物館 山崎茂さんの全国郷土玩具具行脚」に、その年の干支「卯」にちなむうさぎの玩具を展示してから、今回の虎によって十二支すべてをご紹介したことになります。

山崎氏の玩具は約1万2千点あり、干支以外にも「船」や「明治時代」などのテーマで企画展を開催してきました。また、企画展「堺事件」では横浜開港人形、企画展「遠流の土佐」では相合傘といった関連するモチーフの玩具を展示しました。さまざまな郷土玩具をご紹介するために、今後も資料調査や分類整理を進めていきます。どうぞお楽しみみに!(中村)

山村家 登録有形文化財 旧味元家住宅主屋 囲炉裏の火焚き

毎月第3土曜日(9月18日、10月16日、11月20日、12月18日、令和4年1月22日、2月19日) 9時30分(正午)

当館では、高知県高岡郡津野町(旧東津野村北川)から移築した山村家を野外展示しています。山村民家では茅葺き屋根を煙でいぶして長持ちさせようと、定期的に囲炉裏に火を入れています。その様子を多くの方々に見ていただくため、第3土曜日の午前中に日を定めて火を入れています。訪れた方々には、学芸員が山村民家について解説します。

当館のボランティアスタッフのカルチャーサポートが、薪割や火吹き竹作りなど事前の準備からサポートし、火打ち石や火打ち金で火を熾してみせるなど火焚き当日も大活躍しています。

囲炉裏の火をながめ、パチパチと薪がはぜる音を聞いていると心地良く、火を囲んで会話をするのも楽しいものです。火焚きの日に山村民家へ、ぜひお立ち寄りください。(中村)



次回

開館30周年記念企画展

長宗我部氏とその時代

—一次史料がつむぎ出す、その実像—

令和4年1月14日(金)～3月21日(月・祝)

近年、長宗我部氏に関する定説を覆す研究が続きつぎと出されています。その背景には、当時の古文書、いわゆる一次史料に依拠した研究の進展があります。本展では長宗我部氏に関わる古文書など約50点を展示し、長宗我部氏が生きた時代をリアルに描き出します。



絹本着色長宗我部元親像 (秦神社蔵)

第12回 長宗我部フェス

11月27日(土)

迫力満点の鉄砲隊演武やステージイベント、講演会などで戦国時代を堪能!

第16回

岡豊山フォトコンテスト作品展

11月26日(金)～令和4年1月30日(日)

作品募集中! 〆切り 10月24日(日)

休館のお知らせ

臨時休館: 12月11日(土)～12月16日(木)

年末年始: 12月27日(月)～令和4年1月1日(土)

岡豊風日(おこうふうじつ) 第113号
令和3年(2021)9月1日
編集・発行 (公財)高知県文化財団
高知県立歴史民俗資料館
〒783-0044 南国市岡豊町八幡1099-1
TEL 0888(866)22211
FAX 0888(866)2110
開館時間 午前9時～午後5時
休館日 年末年始12月27日～1月1日
臨時休館あり
観覧料 (通常展)大人(18才以上)470円
団体(20名以上)370円
(企画展)通常展込520円
団体(20名以上)420円
無料・高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳
所持者、身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者
保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所
持者とその介護者(1名)

印刷・川北印刷株式会社

<https://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~rekimin/>
Eメール: rekimin@kochi-bunkazaidan.or.jp

開館30周年記念企画展

田辺寿男の民俗写真5

—春夏秋冬 としの祭り—

10月8日(金)～12月5日(日) 会期中無休

高知県の民俗を調査研究し、写真に記録した田辺寿男氏の民俗写真展第5弾です。季節の移り変わりのなかで営まれてきた年中行事や暮らしのモノクロ写真約100点を展示します。



大黒祭 四万十町(旧窪川町) 昭和54年

企画展関連催し

●対談

「田辺寿男の写真を語る」

11月13日(土)

14:00～15:30

小林勝利氏(写真同人「現」会員)

武吉孝夫氏(同会員)

●シンポジウム 四国民俗学会と共催

「田の神まつりの一年」12月5日(日) 13:00～16:00

●ミュージアムトーク(担当者による展示解説)

10月30日(土)・11月6日(土)・28日(日) 14:00～14:30

※企画展関連催しは、すべて観覧券要

対談・シンポジウムは要予約(電話・メール・FAX)、先着各60名

コーナー展 開催中～10月17日(日)

軍医がみた日清・日露戦争

日清・日露戦争に従軍した高知県出身の軍医・吉本其業。彼が記した従軍日誌などの貴重な資料を初公開します。

特別コーナー展 9月16日(木)～11月23日(火・祝)

ぞんコレ! ～知れば知るほどソンソンするれきみんコレクション～

「ぞんぞんする」をテーマに、考古・歴史・民俗・美術工芸の各分野からこれまでとは違う切り口で資料を展示します。

コーナー展 10月8日(金)～令和4年3月21日(月・祝)

昔のくらしの道具

ハガマや炭火アイロンなど電気を使わないくらしの道具を紹介します。

コーナー展

えと 干支の玩具寅

12月17日(金)～令和4年1月30日(日)

郷土玩具収集家・山崎茂氏のコレクションを中心に、干支の

「寅」にちなんだ全国の虎玩具を展示します。



出雲張り子(島根県)